



さくらと扇

君がため

惜しからざりし

命さへ

長くもがなと
思ひけるかな

二人の姫の熱くて哀しい物語

2020/2

制作 神家正成



秀吉、家康…
時の権力者から国を守った
女たちの戦

歴史小説イノベーション! 旗本の女! 地方自治体(栃木県さくら市) コラボレーション第一弾

上段が作中年月、下段が物語の主な舞台です。 左記3作品は宝島社文庫、『赤い白球』は双葉社単行本。

2014年2月
南スーダン PKO



2015年3月
富士学校と東京



2017年4月
千葉県柏市



1939年~1945年
朝鮮、東京、フィリピン

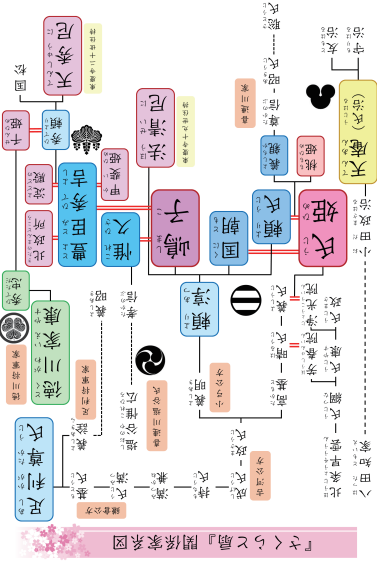


神家正成 公式ウェブサイト <https://kamiya-masanari.com/>

右のQRコードを読み取ってください。
各作品の読後に楽しめるおまけ掌編をご提供しております。
日々雑記(ブログ)や「#記念日にショートショートを」、
自衛隊用語辞典、韓国辞典など随時更新中。TwitterやFacebook
noteにて最新情報を発信中。お気軽にフォローしてください。



石高わずか五千石の下野国の小藩、喜連川藩は、なぜ十萬石の大名同様の扱いを受けたのか？
その裏には、名門足利氏の血を引く二人の姫君、鳴子と氏姫の存在があった——。
美しく武芸にも優れた鳴子と、古河公方の娘で和歌をこよなく愛する氏姫、二人のふるさとに、雲霞のごとき大軍を率いた豊臣秀吉が迫る。
その後、関ヶ原の戦いに勝った徳川家康も、幕藩体制の強化を進める。ふるさとを愛する人の危機に、凍として立ち向かった人々の物語！



関東戦国時代の知られざる二人の姫の戦！
秀吉、家康など、迫りくる新しい権威の前に、ふるさとを愛する人を護り通した女子の戦と、それを支えた男たちの、熱くて哀しい物語！
栃木県さくら市(市のウェブサイト『鳴子とさくら姫』として連載)と探鯊の会(歴史時代小説家の親睦団体)のコラボレーション小説。



序章 皇月の風



天庵 小田氏治

馬上の姫は、美しい。自身も常歩で歩く馬に揺られながら、

天庵―小田氏治は思った。皇月の風が、笠を被っていない嶋姫の束ねた髪を揺らす。(P10)

嶋姫は、帯に差した扇子を抜いて開く。舞うまねをしながら、

龍の玉鬘の元となった紫式部の源氏物語の和歌を、すらすらとそらんじる。

「怒ひわたる 身はそれなれど 玉鬘 いかなる筋を 尋ねきつらむ」

扇面に描かれているきくら吹雪が、空を鮮やかな春の日に染め上げる。(P16)



「皇月の風のような御仁でしたな」天庵の声にながず嶋姫は、さつきと呼ばれた馬の白茶のたてがみを、慈しむようになでた。馬は新しい主人を見定めるかのように、潤んだ瞳で嶋姫を見つめてくる。(P26)

第一章 晩秋の扇

しかし、何ゆえ我が夫が、猿などに尻尾を巻いて逃げねばならぬのだ」

「姫様、猿ではなく関白様でございます」奈葉がゆんわりといさめる。

「猿でなければ物の怪か、小田原のお城は落ちたそうではないか」(P30)

嶋子が生まれましたとき、父は顔をしかめたそうである。馬に揺られながら領内の道を進む嶋子は、喉に刺さった魚の小骨のような話を、思い出していた。(P36)



龍笛

龍笛のさつきなたてがみをなでる。

城主の妻となった時から覚悟はしていた。だが、まさか夫が逃げるとは――。

考えたこともなかった事態に、思いは乱れ、

何をどうするべきなのか分からない。(P43)

夫は嶋子を見つめてくる。あまりの近さに頬が熱くなる。

「喜びの連なる川と書き、喜連川と呼びたい」

喜連川―い響きだ。(P49)

「おっと、見とれちまつたぜ。あんた好い女だな」

低い砕けた声に、嶋子は眉根を寄せた。

「大蔵ヶ崎城城主、塩谷安房守が室、足利左兵衛督が娘、嶋と申す。そなたは「威勢がいいねえ。女はそうでなくちゃいけないぜ。奥羽の龍、伊達藤次郎だめ、俺のことよ。あんた推久なんて弱っちい奴じゃなく、俺の側にならねえか」(P63)



豊臣秀吉

やがて秀吉は破顔した。「―うみやい」秀吉の高らかな笑い声が響く。(P67)

秀吉が扇子を手に打ち付ける乾いた音が響く。

「嶋―お主は、この扇と同じよ」

秀吉が金色の扇子を頭上で広げた。

日本の本と明や朝鮮の地が、金箔で飾られている。(P79)

第二章 籠中の鳥



豊臣秀吉

「わ、わらわは、かわいそうで、役立たずなのか」切実な訴えに、天庵は氏姫を抱いていた腕を解き、

氏姫の小さな両肩に載せた。

向かい合い、眼を合わせて氏姫を見つめてくる。(P95)

自然と言葉がこぼれ落ちた。

「春の野に 霞たなびき うら悲し……」

風が氏姫の言葉を震わせる。

「この夕影に うぐいす鳴くも」

言葉を継ぐ男の声が、突然、さくら橋のほうから聞こえた。(P108)

男女の機微をまだ知らぬが、それらを詠んだ三十一文字によって、

どんな想いを抱くのかは知っていないつもりだ。

君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな (P119)



かわせみ

先ほどのつがいのかわせみが、寄り添いながら鳴き、さくら橋を越えてゆく。

一歩、踏み出す勇ましさかほしい――。(P124)

初めて自らの想いで、誰かの役に立つことができた――。

それだけで氏姫は満足であった。

公方の血を引く私は、自らの想いを封じ込め、籠中の鳥として、

生きねばならぬ。かわいそうで役立たずの生き方が、また始まるだけだ。(P131)

第三章 鞍馬の狐

その後ろ姿を見ながら弥右衛門は息を吐き、拳を握る。

―忠臣は二君に仕えず。忠なれば則ち一心なし。

後に続く言葉が口からこぼれた。貞女は二夫にまみえず。(P159)

続いて鉄炮を構えた弥右衛門は、大きく息を吸う。秋分の今日、

山は木々の実りの匂いに満ちている。息を止め、目当て筋割を重ねて

的に合わせる。闇夜に霜が降りごとくしんわりと引き金を絞った。

火挟みが落ち、右頬から食いしはった歯に激しい力が伝わる。(P164)



徳川家康

第四章 浪速の夢

「甲斐姫、大丈夫」

甲斐姫は懐剣を拭い、鞘に戻しながら、笑う。

「忍城に攻めてきた三成の手下の方が、手慮えがありましたぞ」

嶋子は安堵のため息をこぼす。路地には男の刀が転がっている。(P195)

「彼の地は鮎が絶品と大關様から聞いております」

喜連川がいかに良い地かを話す家康を見て、氏姫は胸の内にさざ波が立った。

二百五十万石にも及ぶ家康の關東の所領に比べ、氏姫の御堀分所の所領は

わずか三百石だ。ただ、その三百石は、家康の所領の中心にある。

―坂東の地をお頼み申しますぞ。秀吉の言葉が思い浮かぶ。(P202)

麗しの花見から五月後の八月十八日、秀吉は静かに息を引き取った。

辞世の句は一言。

第五章 女子の戦

外ではさくらがほころび始めている時節だが、

全身から汗が、夏のさなかなのごとく流れ出てる。

もうろうとする頭の中に、五、七、五、七、七、七、七と刻む、

歌を詠み上げる節回しが、先ほどからずっと聞こえていた。

「姫様、もう少しでございます。姫様」(P224)

「そのようなことは、申しておりませぬ」

嶋子の言葉に、三成は能面のような顔の眉をすり上げる。

「大關閣下のご恩を、もう忘れたいと申すか」

相変わらず歯に衣着せぬ方だ。もともと、

衣を着せることができような質であれば、

ここまで敵を増やすこともなかったであろう。(P224)

愛、憎しみ、いたわり、さげすみ、求め、裏切り、

生、老、真、嘘、美醜、善、悪――。

体の内から、ありとあらゆるものが噴き出て、体を貫き、心を震わせる。

「残され、生きる者のほうが」嶋子は両手で自分をかき抱き、

天を仰ぎ見て目を閉じた。「つらいのでございますよ――」(P253)

第六章 紅蓮の炎

血走った涙の眼は、あからさまに嶋子を見下していた。

「女子の戦に敗れ、子をなせぬ女が何を言うか。我が子を

かき抱いたことのない女の言うことなど当てにならぬわ」

涙のさげすむ笑い声に、嶋子の体は小刻みに震え始める。(P303)

紅蓮の炎が、皇月の大坂城を包んでいる。

嶋子は、夜空に燃え上がる大坂城を見て足がすくんでしまった。心を決めて

この場に臨んだ。しかしながら女子の思いなど、やにわに吹き飛ばす男どもの

戦の前に、夏の氷のごとく想いがみるみるしぼんでゆく。(P313)

終章 皇月の空

「それでは天とは、いったいどのようなものなので

ございませうか」嶋子は、目の前に座る

法泰天秀尼の若い凛とした声に、頬を緩めてしまう。

だが、同時に墨染めの法衣姿で、真白の頭巾を

被らざるを得ない天秀尼の運命に、胸が痛む。

「それはですね……」嶋子は言葉をつまみ切った。

天秀尼の隣に座る姉―東慶寺十九世住持である瓊山法清尼が、

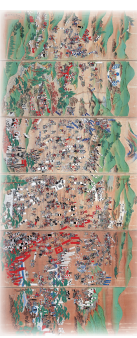
心配げな様子で嶋子を見つめてくる。何か言いたげな顔だ。(P330)



鎌倉 緑切寺 東慶寺



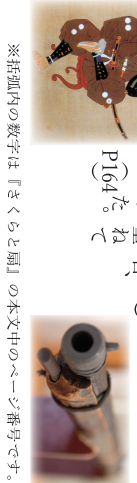
大坂城



関ヶ原の戦い



石田三成



※括弧内の数字は『さくらと扇』の本文中のページ番号です。